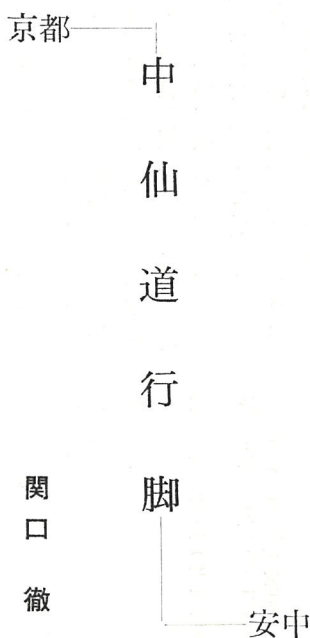


新島先生を求めて



出発前——穴の開いた鍋

「菅サーン。この鍋、穴が開いてるー」
初めてのキャンプで、慣れない手付きから
やっつけた火の向こうから、声が飛ぶ。

「エッ？ ほんまか？」

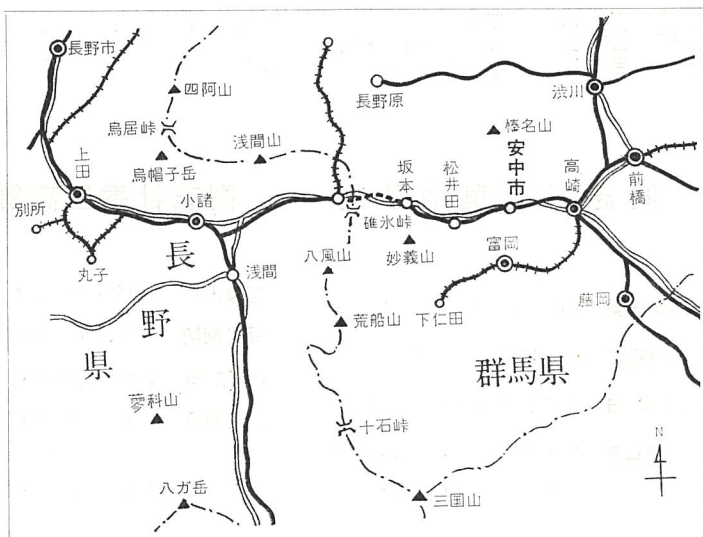
テントから答える。菅隊長だ。鍋の所有者
でもある。「なんとか活かそうヤー」

事件は初端から起った。われわれはまだ京
都にいた。同志社大学で、大塚総長・泰理事
長・その他、大学の関係者などに見送られ、

関口 徹

若王寺山頂の新島先生の墓前で挨拶をし、その足で水の必要から南
禅寺奥の岩場にテントを張り、晩
飯のカレーライスを作っている最
中のことである。穴の開いた鍋を
かかえて、果して、群馬県の安中
迄歩いて行けるのだろうか？

この日（八月三十一日）の読売新聞には、
『新島襄しのぶ徒歩旅行』という見出しで、
次のように載っていた。



『同志社建学の精神を学ぼうとこのほど発
足した「同志社精神研究会」の学生、経済
学部三年菅泰介君ら六人は一日から十五日
間、八十年前校祖新島襄が歩いて旅した京

都―群馬県安中市(約四百五十キロ)を徒歩旅行する。

安中市は新島家が仕えていた板倉藩主の家のあるところで、新島襄が明治十五年七月文筆家徳富蘇峰、詩人湯浅吉郎氏らとともに京都を出発、大津から船で米原に渡り、中仙道經由で九日目に安中市に着いた。学生たちは「新島襄―人と思想」(魚木忠一著)の中に出てくる旅日記から同じ徒歩旅行を計画した。

一日未明出発、大津市に向かい浜大津港から琵琶湖汽船で彦根へ、岐阜―中津川―塩尻―小諸を経て碓氷峠から安中市にはいる。旅日記にちなみ徒歩、悪天候でも歩き



木曽路をゆく

つづけ、ずっとテントで野営、十五日午後安中市の安中教会に着く。旅行中は毎日午前六時起床、七時出発、三十分歩いて五分間小休、昼は一時間休憩、夕方六時まで歩き続け、夕食後討論会をして新島襄をしのぶ。参加者つぎのとおり。岡崎隆雄(商三森高省治(文二)関口徹(同)掛樋繁男(經二)辛島昭延(法一)』鍋に穴が開いていたとて、新島先生に挨拶し、総長・理事長から励まされ、新聞に載せられて公約した以上、票取り政治屋と違つて、公約実現に断固として邁進せねばなるまい、『オーイ、出来たぞ!』作つたものが、たまたまカレーだったから

か? それとも、出発祝も兼ねて、しばしの別れとて正當な肉を入れた、その肉がふさいでくれたのか? 兎に角、出来るものが出来て穴が開いているというのなら、その穴のふんだけ軽いというもののだ!

いよいよ出発

九月一日 晴。京都(南禅寺)出発、浜大津より琵琶湖汽船「ハリマル」に乗り、竹生島で「ミユキマル」に乗り替える。旅行中唯一の乗物。彦根着、そこでキャンプ。

二日 米原を過ぎ醒ヶ井で昼食。雨が降りはじめ、滋賀県が見える岐阜県のはずれ、関が原町今須の妙応寺に泊る。

三日 不破関跡を見学、垂井・赤坂を通り、揖斐川・長良川を渡り、岐阜市鏡島の教寿寺に泊る。この寺は幼稚園をかね、われわれは本堂で、園児が昼寝に使う蒲団を幾枚かつないで寝た、体の疲れと乳の臭いにくるまつて死人のように。

四日 晴。遅れて起床。出発する頃は、訝しげにわれわれを見る先生と笑いかけてくる園児たちがいたから、きつと八時半頃であつたと思う。

足の痛さはどうにもならない。三十分、五



不遑隠跡にて（右より二人目筆者）

分の休憩も、休憩後歩き出してから痛みを感じなくなるまでがひと苦勞で、休憩も休憩にならない。マメはマメを生む。別なところに出来たかと思うと、同じマメのところにそれを包むようにもつと大きいのが上に出来る。マメの乱生だ。

全隊員六名の内、まず故障を来し始めたのは掛樋隊員であった。彼の顔はすぐれず、歩

き方・足の運びもいつもと変である。「同志社精神研究会・京都―安中踏破」の幟を中心として、一団となって進むわれわれから次第に遅れるようになった。なにしろ、今日は美濃加茂市だ。出発が遅れた上、まじまじしては着けないことは必定。幟は同じペースで進む。隊長は掛樋隊員につきっきりで遅れて来る。「オーイ、ストオーバー!!」岐阜市をすぎ岐阜町に来たときだった。「捻挫だ。」近くで自転車を借りて病院へ。これから歩き続けて行く事は無理だ。」はつきりと医師は言う。協議の結果、掛樋隊員を京都に返すことに決る。岐阜駅で「養生しろよ」「成功して下さい」「ありがとう」握手、別れる。

五人歩き出す。何事もそうだが、なれる迄が大変なのだ。徒歩もそうである。それにしても、出発前にマメに対する予備知識があったなら、とうとう足はマメ畑になった。辛島隊員は両足に十数個のマメをつくった。他も相当に出来ている。こうなってくると、歩くといつても、熱湯に足を入れるように路に足をおろして行くような具合だ。左をおろして右をおろす。一歩。歩く調子を得るために、われわれは「ガンバ、ガンバ」と唱え合った。

「ガンバ」は「ガンバレ」を一歩の時間的調子に変えたもの。「ガンバ、ガンバ」と言っているうちに、二歩前進してるんだ。」この言葉、経験しなくては味わえない。「ガンバ・ガンバ」で各務が原駅に着く。客一人もない待合室で横になる。ここで二組のテントのうち一組を同志社に返送する。駅員に尋ねてマメの治療に行く。産婦人科と歯科を兼ねている病院しかない田舎町だ。「男の子がマメを生んだんですつて。」看護婦のお世辞にも笑えない。もうなからななにまで真剣なんだ。包帯にまかれて、足がくつに入らないと騒ぎ出す。「アッ、イタタ」まったくこのマメめ。この治療費千四百円也。サイフも「アッ、イタタ……」

夜になってしまった。待合室に泊ろうと各務が原駅へ。幸運なことに、電話をかけてくれて、駅員サンが野呂武夫氏を紹介してくれた。氏のお世話で今夜も畳の上で寝られた。ただ氏の息子さんが同志社大学に学んでいるというだけで……。晩飯をご馳走になった。

一路、安中へ

五日 野呂氏で朝飯もご馳走になった上、水飴もいただいた。氏は水飴製造に携わって

いるほか、各務が原の市会議員でもある。氏の家庭的欲待に別れをつけ、日本ラインを右手にながめ、美濃加茂市でキャンプ。

六日 御嵩町、旧中仙道の細久手を通り、山中のオアシス、大湫公民館に泊る。

七日 旧中仙道から国道十九号線釜戸へ出て、恵那、中津川に向う。東円寺に泊る。

八日 いよいよ木曽路に入る。隊員も慣れて「隊長ノ」と呼ぶ。足の方も慣れて来た。馬籠の藤村記念館に寄る。妻籠を経て南木曽町公民館に泊る。

九日 小雨。三渡野、野尻、須原、倉本等中央線と二人三脚。寝覚の床臨川寺に泊る。

浦島太郎の伝説地。新島先生はここで蕎麦を口にされた。

十日 上松・福島を過ぎて木曽義仲の徳音寺に寄る。蘆原の極楽寺に泊る。曇と曇の間からきのこが生え出た、ほこりだらけのお堂で、ローソクをともし、仏像たちに見守られて寒い一夜をすごす。全くの極楽だ。

十一日 鳥居峠を越えて漆器の平沢へ。ここで、「木曽の主」といわれて、木曽にあかぬ立教大学教授菊池重三郎氏に会う。氏は「チップス先生さようなら」(ヒルトン作)

の翻訳者でもある。「木曽路は春がよい。縦を知ったら、木曽路の横を知りなさい。」と氏はいう。「菊池先生さようならノ」その晩洗馬の満福寺に泊る。

十二日 塩尻峠を越えて、下諏訪町。通橋の公民館で一夜をすごす。

十三日 和田峠、長門町、笠取峠を越えて望月町へ。そろそろ安中に近づく。信永寺で夢を安中に結ぶ。

十四日 小諸市で同志社からの電報を受取る。「成功祈る」軽井沢のシーモア・ハウスで暖炉を囲む。いよいよ明日は安中だ。

十五日 曇。軽井沢駅でわれわれを迎え出してくれた原市の校友、半田隆一氏と会い、一緒に碓氷峠を下る。松井田町、郷原、原市と快調にすぎる。あたりは真暗だ。日光街道を思い出すような原市の杉並木をすぎると、どうだ、われらの目的地安中のネオンが静かに行く手に見える出した。安中到着の模様を岡崎隊員は次のように記している。

「やったノ ついにやったノ 俺たちはやっただんだノ 見知らぬ顔が暗闇の中から次々と笑いかけてくる。新島学園生徒のたくつらッシュが幾度も闇をよぎる。ヒロイズムとい

われたっていい。ヒロイズムに酔うことも、青年時代の貴重な思い出になるだろう。

苦しい合宿だった。……だが兎に角着いたのだ。われわれはその夜、新島学園の岩井校長先生・安中教会江川牧師、および校友関係者などと、握手と挨拶をかわしながら喜びにひたっていた。」

その夜、原市にもどり半田隆一氏宅に泊る。新島先生の遺髪・硯・その他遺品をみせていただく。

十六日 江川牧師とベーケン先生に案内されて車で安中の新島先生に関する遺跡を見学。その後、新島学園生徒と交歓会。晩には市の有力者との交歓会。安中教会に泊る。

十七日 岩井校長ご夫妻・学園の生徒らの「また会う日まで」(讃美歌四〇五番)の歌に見送られて、安中駅を出発、一路東京へ。東京の中心、銀座を例の幟をたてて闊歩。同志社大学ここにあり。その晩、早慶同交歓会。

十八日 東京校友会との交歓会。夜行で帰路に着く。京都着は十九日午前十時。校祖墓参。同志社にて総長・理事長に旅行の報告をして、安中行脚を終える。

(文学部国文二回生・同志社精神研究会々員)